

## 20目 大津 -> 京都

20日目は12月25日(土)、7時にJR瀬田駅をスタート、 天気は晴れ、車の温度計では外気温1度、寒い、旅のお供のFMラジオは家に忘れて今日は無し。 歩けば温まると思って急ぎ足で歩くが、頬にあたる風の冷たいこと! 耳が千切れそう。

### 瀬田の唐橋

木の根のお堂、タコの足にも見える



木の根で作った寺のお堂を見て足を止めて写真、そこに生えていた木をお堂にしたのかと思ったら、説明板には屋久島の杉の根を持ってきたとのことのでがっかり、おまけに近くで見ると木の根をコンクリートで固めている様に見え、悪趣味。

瀬田駅から1時間程歩いて瀬田の唐橋に到着。 車では何度も通過したことがあるが歩いて渡るのも、付近を眺めるのも初めて。 唐橋のたもとに龍王宮神社があり、その横に俵藤太のムカデ退治の絵がある。 このムカデ退治は近江富士(三上山)のそばを歩いたときにも書いてあったが、瀬田の唐橋との関係が分からず調べた。

瀬田の唐橋



ムカデ退治の絵



「朱雀天皇の時代のある時、近江の国瀬田の唐橋に長さ20丈(60m)もの大蛇が横たわるということがあった。人々は怖れて橋を渡ることができなかったが、そこに出くわした藤太は、少しも怖れることなく大蛇の背を踏みつけて橋を渡ってしまう。その夜、ひとりの若く美しい女性が藤太を訪ねてきて彼に言う。「私は昼間お会いした大蛇で、琵琶湖に住む龍神の一族の者ですが、三上山の百足に苦しめられ困っています。あなたを見込んで、百足の退治をお願いしたい。」藤太が快諾し、先祖より受け継いだ名剣と重藤の弓に3本の大矢を携えて三上山に臨むと、稲光と共に、2、3千本余りの足の全てに松明を掲げて、三上山を7巻き半するほどの大百足が現れた。

藤太は2本の矢を射るが、大百足には通じない。そこで矢尻に唾を吐きかけ、南無八幡大菩薩と祈念して射ると今度は通じ、大百足を退治することができた。 藤太は、龍神の女性からお礼にと、いくら裁っても尽きることのない巻き絹2つと、思うままに食べ物の出る赤銅の鍋、米の尽きることのない俵を贈られた。 またその後龍宮に招かれ、龍王から黄金札(こがねざね)の鎧と太刀、赤銅の鐘を贈られた。」

そう。人はムカデより強く、ムカデは龍よりも強いと云うことになるが、龍ってそんなに弱い存在だったの？とも思う、まあ昔の伝説だし、話が面白ければいいか。

瀬田川でのボート練習



龍やムカデよりも橋の下の瀬田川でボートの練習をしているのが、いかにも冷たそう。女性も混じってどこかの大学のボート部の寒稽古か。冷たい強風で転覆しなければ良いが、などと考える。橋の上から琵琶湖が見える、このウォーキングでは初めて見る琵琶湖となる。

瀬田川を渡り、京阪石山駅の脇を通って北上、南に行けば石山寺となるが旅を急ぐ身で寄り道は無し。途中で東レの瀬田工場の横を通過、現役時代この研究所にガラスの化学変化について教を請いに来たことがある。あの時は途中の景色などなんにも目にはいらなかったなあ。

### 膳所

道は何度も折れ曲がり、城下町特有の7曲がりの雰囲気になったところに膳所城勢多口総門跡の石碑があり、地名は膳所(ぜぜ)で、膳所城の城下町。と言うよりは、百人一首で「あさぼらけ うちのかはぎりたえだえに あらはれわたるせぜのあじろぎ」のぜぜの方が馴染みが深い。白状すると、この下の句は覚えていたものの上の句はどうしても思い出せず、インターネットのお世話になった。

膳所城の城は今はなく膳所城公園になっている、この公園に寄り道すると時間がかかるので、東海道が最も琵琶湖に接近しているところで、琵琶湖へ寄り道。地名は御殿浜で湖岸は公園となっており、ジョギングの姿もチラホラ、多分中学校の野球部、ユニフォームの中学生も集団で駆け足中、これも寒稽古か？このあたりの琵琶湖は砂浜で海岸と同じ、湖岸に鴨がいる。写真を撮ろうと湖岸に降り近寄ると、波打ち際にいた鴨があわてて沖合いに逃げてゆく。取って食うわけではないのに！

慌てて逃げる鴨、左側に見えるのは近江大橋





### ぼったん床机

膳所の町には旧家が多いが、面白いものを見つけた。家の道に面したところに作りつけの折りたたみ式の縁台がある。

ぼったん床机のある家



折りたたみである「ぼったん床机」

最初は気に留めなかったが、何軒も同じものがあり、折畳み式の縁台と気が付いた。

インターネットで調べると「ぼったん床机(しょうぎ)」と書いてあり、折畳み時に「ぼったん」の音がするところからのネーミングだとか。

全国どこにでもあり、特に京都に多いらしい、今迄まったく知らなかった。

夏には縁台として、うちわを手に持って浴衣で夕涼みする姿が目につく。いいなあ。

家内に写真を見せると、小さい時に住んでいた奈良市内の借家にも同じものがあつたとのこと。

### 義仲寺(ぎちゅうじ)

膳所のはずれに義仲寺があり、トイレ休憩も兼ねて入場料 200 円を払って見学、尾籠な話で申しわけありませんが、本日はことのほか寒く、1時間置きにトイレを探す始末。

この義仲寺はもちろん 木曾義仲の寺、説明では「治承 4 年(1180)、義仲公は信濃に平氏討伐の挙兵をし、寿永 2 年(1183)5 月、北陸路に平氏の軍を打ち破り、7 月に京都に入られた。翌寿永 3 年 1 月 20 日(4 月改元して元暦元年)、鎌倉の源頼朝の命を受けて都に上ってきた源範頼、源義経の軍勢と戦い、利なく、この地で討ち死にされた。享年 31 歳。

義仲寺 芭蕉が植えられている



その後、年あつて、見目麗しい尼僧がこの公の御墓所のあたりに草庵を結び、日々の供養ねんごろであつた。里人がいぶかって問うと、「我は名も無き女性」と答えるのみである。この尼こそ、義仲公の側室巴御前の後身であつた。尼の没後、この庵は「無名庵」となえられ、あるいは巴寺といい、木曾塚、木曾寺、または義仲寺とも呼ばれたことは、すでに鎌倉時代後期弘安ごろの文書にみられる。時代は移り、室町の頃に近江守護佐々木六角氏が当寺を再興、寺領を進めた。元禄年間には芭蕉翁が境内草庵にたびたび滞在、また翁は遺言によりここに埋葬され、俳諧道の聖跡とされてきた。」

そんなわけでこの寺に、義仲と巴御前と松尾芭蕉の墓がある。俳句の聖地であることから、寺内には19もの句碑がオンパレード。又、寺の中に神社「木曾八幡社」があり、神仏混交の見本みたいなところ。

木曾義仲の墓



巴塚



松尾芭蕉の墓



#### 大津宿 53 番目

義仲寺を過ぎると 53 番目の宿場となる大津宿となり、東海道は町中の商店街を歩くことになる。街角で見つけたのは右の石碑。

有名な大津事件の碑である。  
「大津事件は、1891 年（明治 24 年）5 月 11 日に日本を訪問中のロシア帝国の皇太子・ニコライ（後のニコライ 2 世）が、滋賀県滋賀郡大津町（現・大津市）で警備にあっていた巡查・津田三蔵に突然斬りかかられ負傷した、暗殺未遂事件である。行政の干渉から司法の独立を確立し、三権分立の意識を広めた近代史上重要な事件とされてきたが、実際にはより複雑な性質をもつ。議論の末津田三蔵は無期徒刑となり、司法大臣山田顕義は辞任した。」  
その切りつけた場所がこの街角。  
当時の小国日本は大国ロシアに戦々恐々としてすぐさま明治天皇が京都まで見舞いにかけてつたとのこと。

ロシア皇太子受難の碑



丸い出窓の旧家



大津自体はベンガラ格子の家や旧家がところどころにあるが、宿場の遺構は何も残っていない。そんな旧家の中で、2 階の窓が丸く張り出した出窓になっている旧家があり思わず写真、明治か大正に改築してこの出窓を作ったのか？



## 蟬丸神社

大津の町中を通り抜け、碑と説明板のみの大津本陣跡を過ぎると緩やかな勾配の坂道となり、逢坂山越えとなる。登り道の始めにあるのが蟬丸神社で「これやこの・・・」の歌を詠んだ琵琶の名手蟬丸を祭っていて、音曲芸道祖神の碑もある。因みに蟬丸神社はこの逢坂山に下社、中社、上社の三つがあり最初にあるのはこの下社。その蟬丸神社に美女で有名な小野小町の塚があるとガイドブックに書かれていたので、「美女とあらば挨拶せねばなるまい」と思いその塚を探したが境内では見つからなかった、やっぱり美女には縁がないのか。

蟬丸について調べると、有名な謡曲があり「延喜の帝（醍醐天皇）の第四皇子・蟬丸は琵琶の名手だったが、盲目のため帝の命により逢坂山に捨てられる。盲目は前世の業であり、それを今生で償い、良き来世を得よとの親の慈愛と覚悟はするものの、一人になった蟬丸は愛用の琵琶を抱いて悲嘆にくれる。そこへ博雅の三位という廷臣が現れ、藁屋を造って蟬丸を住まわせ、ご用があればお世話すると告げて去る。そこへ、延喜の帝の第三子で逆髪と呼ばれる姫君が現れる。この姫もまた生まれつきの狂人で、ぼうぼうたる黒髪が逆立ち、櫛を入れて撫でつけても下りないために逆髪と呼ばれる。宮室を追われ、心ない村人の嘲笑を受けながら彷徨し続ける逆髪が逢坂山にさしかかると、路傍の藁屋から妙なる琵琶の音が聞こえてくる。不思議に思って近づくと、中から「外に音するは誰か」と問う声があるが、それは懐かしい弟君の声であった。姉弟二人は抱き合って再会を喜び合い、互いの不幸をかこちあい惨めな境涯を嘆きあうが、刻がすぎ夕暮れになったので、逆髪は後ろ髪を引かれながら立ち去る・・・という今昔物語を出典とした名曲が謡曲蟬丸である。」蟬丸と言う名前自体が肉体的な障害を表した名前のような気がするし、逆髪の宮もそんな感じがする。昔の人は残酷。

音曲芸道祖神については「古来、冷泉天皇の頃日本国中の音曲諸芸道の神とあがめられ、音曲諸芸道で生きる人たちは、必ず当神社の免許を受けることとされていたと伝えられる」とある。

蟬丸神社と音曲芸道祖神



逢坂の由来の碑



逢坂山関跡碑



## 逢坂の関

排気ガスの臭い国道1号線の登り坂の歩道を歩いていくと蟬丸神社の上社があり、そのそばに「逢坂」の由来を書いた石碑があって、「日本書紀によれば、神功皇后の将軍・武内宿禰がこの地で忍熊王とばったりと出会ったことに名の由来、この地は京都と近江を結ぶ交通の要衝で平安時代に逢坂関が設けられ・・・」との説明。随分古くから逢坂の地名はあったらしい。

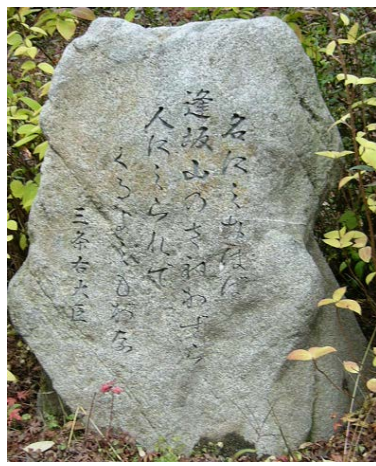
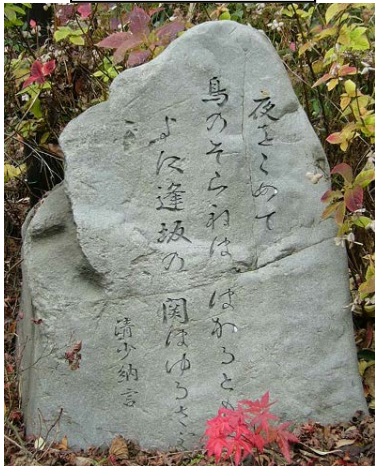


逢坂山の峠に、逢坂山関跡の碑があり、小さな公園になっていて、百人一首でおなじみの逢坂山の三つの歌碑があった。百人一首も長いことしていない。

夜をこめて  
鳥のそらねははかるとも  
よに逢坂の  
関はゆるさじ  
清少納言

名にしおはば  
逢坂山のさねかずら  
人にしられで  
くるよしもがな  
三条右大臣

これやこの  
行くも帰るも別れては  
知るも知らぬも  
逢坂の関  
蝉丸



三条大橋着

逢坂山を越え、大谷を過ぎ、国道1号線を名神高速を右手に見て暫く歩き、パイハスの歩道橋をわたって旧東海道は1号線と離れて町中となり京都の山科に到着。既に時間は11時で12時に三条大橋で待ち合わせの約束、大慌てに慌てて、わき目もふらずに山科を歩き抜け、蹴上げから京都に入り、12時半に30分遅れで京都三条大橋に到着。その三条大橋の手前で「坂本竜馬とお龍の結婚式場跡」の石碑を見つけた。ピカピカの真新しい石碑で最近の竜馬ブームにのったものか。

坂本竜馬結婚式場跡の石碑



三条大橋の公園にある高山彦九郎の像、江戸時代の勤皇家、皇居を拝んでいる





三條大橋で、雪が時折舞う寒い中を 30 分も待たされて震えていた孫の小さな花束に迎えられて無事東海道 53 次を終了。

高瀬川と加茂川に挟まれた 2 条木屋町の料亭で昼懐石の昼食。その木屋町通りで武市半平太の寓居跡碑を見つけた。武市半平太は土佐勤皇派の盟主で、坂本竜馬の友人。何よりも名前が格好良く、月型半平太のモデルになった人。

今回のマンホールの蓋  
大津市のマンホールの蓋の写真を撮り、あまりにも多くの絵が書かれているので調べたら、面白いものを見つけた。私の撮った蓋はモノクロ版だが、100 周年の蓋はカラーバージョンで、左下の犬の手が赤色で「犬・手・赤 → ワン・ハンド・レッド → 百周年」の駄洒落になっているとのこと、ホンマかいな!

武市半平太の  
寓居跡碑



三條大橋のたもとで  
逃げる孫を捕まえながら



大津のマンホール蓋、大津名物がテンコ盛、市の木 (山桜)、市の花 (叡山すみれ)、市の鳥 (ゆりかもめ)、ボート、外輪船・・・



インターネットで見つけた 100 周年  
のカラーバージョン



20 日目は 3.5 万歩、約 22Km。

楽しかった東海道 53 次ウォーキングは本日で終了、一応予定通り 2010 年以内に今京都着。

2009 年の 10 月 18 日にお江戸日本橋をスタートして延べ 20 日で計 96 万歩、歩幅 70cm で計算すると 672Km を歩いたことになる。旧東海道は日本橋から三條大橋まで 492Km、宮と桑名間の 27Km は海路であり、今回は電車で移動したので、実質は 465Km、672-465 の 207Km は寄り道やダブって歩いたことになる。つまり 1/3 は余分に歩いたことになるが、その分だけ多くのものを見聞きし、良かった。

長い間のご愛読、まことに有難うございました。  
謹んでお礼申し上げます。